
星屑の街

fuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑の街

【著者名】

f u k i

【ノード】

N1585Z

【あらすじ】

そもそもと書いた短編集です。きっと続かないだろうなという意識の元の単なるネタ投下です。話しあはれがつてないことが多い。ばつらばらに更新する場所。育つことないバラ撒かれた種が辿り着く先、星屑の街。

とかいいつつ、異次元に迷い込んだあげく『成長』を奪われ五歳くらいの子どもになっちゃった女性とその保護者が異世界を渡り歩いて『流れ星』をつくるお話。童話やらなんやらのパロに走る。

星屑の街、案内人との出逢い（前書き）

星屑の街、案内人が参りますので暫くお待ちください。

星屑の街、案内人との出逢い

瞳を開けるとそこは、仄暗かつた。

私は大きな光輝く大きな川の上に佇んでいた。

果てしなく空が遠く信じられないほど川が近い。

黄の光、赤の光、緑の光が気儘に混ざり合つてシャボン玉のように滑らかに溶け合つては色鮮やかに尾を引いて光芒を描いていき、光輝な川の中、金の魚が悠然と水紋を揺らし私の足下を抜けていった。

どこまでも深い深い光の淵。

闇は底なく、光も底ない。ただそこに広がるだけだ。深淵なる光と闇。

「・・・ああ、」

遠くに見えるのはなんだろうか。光の雫がぽつぽつと落ちて、私は天を見上げた。魚を誘う篝火。精靈に備える灯火。光雨。

どこかで音色が聞こえる。

嗤う匂う泣く蔑む瞑る笑む啜る嬉し惑う祈る包む怒り紡ぐ啼く誇し唄う叫ぶ快くひたひたひたひたと。

見上げたさきの暗闇のなか捻れた朱い月に鳳凰が嗤つた。ガラクタばかりの宝箱が如く不思議な世界。チクタクと時計を持った鬼が忙しそうに横切つて、足下を泳ぐ蛙がふくふくと泡を吐き出した。いまだにふる雫の向こう。歪んだ浮船に降り立った三叉鴉が光を啜り、黒猫がはんなりと舞う蝶を追つて光の川を駆けた。

ふりつづく光の雫がぽつぽつぽつ。魚を誘う篝火。精靈に備える灯火。光雨。嗤う匂う泣く喪む瞑る笑む啜る嬉し惑う祈る。光に攫われてしまふと魂が点滅する。包む怒り紡ぐ啼く誇し唄う叫ぶ快く。赤黄青光金の魚朱い月鳳凰時計兎蛙三叉鴉黒猫蝶光光雫雨が歪み捻れて聞こえるのはもはや、ひたひたひたひたひた。

「星露にあたるのは良くないよ」

降り注ぐ光のまにまに。玉響に、音が絶えて。翳されたのは薦色の一つの古びた番傘。和紙を滑つて雫が瞳を見開いた私を避けて垂落する。やわついた聞き苦しい音たちはすっと消えて。柔らかな音が耳朵を震わせた。

美しく見えてもそれは全ての終わり、絶えた望み、諦めの雫。

ここは、そんなモノの通り着く終着点。ごみのように打ち捨てられたモノがただ鈍く光る星屑の街。星屑たちは、呑み込むのを待つている。

ここで独り光の渦に呑み込まれるのを永遠と待つか、それか今ここで俺に捕らわれるか。

「それでも構わないのなら、着いておいで」

そつと差し出された掌に重ねるために伸ばした手が、大きな掌に触

れて。私はその温もりに鮮やかに攫われた。

(意識がなくなる瞬間、ぱりんとひび割れる音がした。)

星屑の街、案内人との出逢い（後書き）

案内人、星屑の街より一人ご案内。これより短し様々な世界へとお連れ致します。

案内人との関係について1

ぱたぱたと短い足で廊下を走り、ようやく辿り着いた部屋の前で柔らかでふにふにした手を伸ばす。紅葉の手とはまさしくこのような手なのだろうと思いつつも必死にドアノブに伸ばすが掠ることさえもできなくてム、と口をへの字に結んだ。こうなつたら。

「・・・よしー。」

ぐ、と気合いを入れてドアノブを睨み上げつつ背伸びをした。が、それでも届かなかつた。小さい足がふるふるさせて諦め悪く必死に扉に手をついて背伸びをしたりぴょんぴょん飛び跳ねたりしたが遙か遠くにある回転式のドアノブは微動だにしなかつた。

それでも諦めず幼子が必死になつている姿はそりゃあ微笑ましい光景だらうよと私の後ろを通りながら笑つた他の案内人やトラベラーマチに内心舌打ちしつつ振り返つて「べーっ！」と舌を突き出すがそれすらも微笑ましいのか飴を押しつけられた。最初は投げつけ返すぞと息巻いていたが、掌の美味しそうな飴に罪はない。

じいと飴を見下ろして次いでぱあっと笑つた私に彼女たちは眉尻を下げて頭を撫でて颯爽と去つて行つた。ふむ、きっと仕事なのだろう。昼から大変なことだ。つてこんなことをしてゐる場合じやなくて！ポツケに飴を突っ込んでわちきの不動の扉を小さな手でぼすぼすと呴いた。

「あーんなーいにーんーあーけーでーーーーつかあける」

「はーはーい・・・、つと、おはよイチル」

「おはよじやないよ、もうお昼だぞ」

がちゃりと扉が開いて私はすぐにその小さな扉に身を滑り込ませた。「イチル、挟まいたら危ないでしょ」と咎めてくるのは私ことイチルの案内人のノアールだ。名前はないのか、と以前聞いたら案内人だから決まった名前はないよと言われたから勝手につけた。

よいしょ、ヒノアールにふわっと持ち上げられた私は習慣のように咄嗟にノアールの首に腕を回してバランスを保ち肩口に頬をあててノアールを見上げる。ヒノアールはいつも眼をあわせて柔らかく笑ってくれるのだ。

抱っこされることも勿論だがノアールの破壊力がある笑顔の間近さに慣れるのには大分時間がかかったがもう慣れた。なぜいっぱしの二十歳の女がこうなったのかというのもう説明してもしたりないくらいだ。

そんなボンキユッポンだったワンドフォーな私の姿はいま端から見て5歳くらいの子どもだ。かつての栄光はどこに、と短い手足と寸胴な身体を見下ろして泣き崩れていたらノアールが「前と別に変わらないけどね」と意地悪をいつてきたのはもう昔のことだ。今思い出しても腹が立つ。私はねちっこいのだ。

ふつふつとわき上がり怒りに田の前の茶色の髪の毛を引っ張ると
欠伸を漏らしていたノアールはぎょっとしてイテテテテと慌てて私
の小さな手を追い払った。

ノアールの青い色の眼に涙が浮かんでる。ふふん、いいざまなのだ
！といつそりほくそ笑んだイチルを目敏いノアールが見過ごすこと
はなく仕返しとイチルの黒髪をぐしゃぐしゃに撫ぜ回した。

「ぐわぐわするから止めるのだノアール！」

「あはははは、細い髪だからよく絡まるねー」

首がぐにゃんぐにゃんと撫ぜる手に振り回されて眼がぐるぐるする。
最初は盛大に反発していたイチルを楽しんでいたノアールだったが
ぐつたりと凭れてきた子どもに慌てて手を止めて顔を覗き込むと顔
を青くしたイチルと瞳があつた。

「いめんじめん」

「うつうふ、ふやけるのも良いかげんにしどのヤロー。お皿いはん
を食べたあとだつたらあやうくリバースするとこだつたぞ」

「そつか、うん。心からリバースしてくれなくてよかつた」

「しね」

「ふげつ」

俺の服汚れちゃうからと爽やかな笑みを浮かべたノアールの顎下に
頭突きを食らわせ、ばたばたと足をばたつかせ離せアピールをする

とパツと離された手のおかげで地面に足をつけれたイチルは腕をくんでふいとそっぽを向いた。

一瞬『ヤバイ!』と思つたが今のは別に私は悪くない。だけど、やつぱりちょっと不安で顎を押されて唸つてゐるノアールをちらりと見上げた。彼は私の恩人なのだと。だけどそれでもわざわざノアールのためにここまで来たのに。小さな手を握つてそっぽを向いたまま口を開いた。

「お、おじりれても今のはわたしはわるくないもん!」

ペいつと戦きつつ吐き出すとノアールはようやく顎から手を放し私と同じ視線になるようにしゃがみ込んだ。けれどそっぽを向き続けるイチルとノアールの視線は交錯しない。

理由もなく一つ零した嘆息に小さくイチルが震えたのに気がついたノアールは仕方ないといつのように苦笑いを浮かべてそつと、ぼさついた黒髪に手を伸ばし撫でつけると、頑なにそっぽを向いていた視線がそろそろと下に向けられて次いで懲りたように交錯した。すぐさまノアールは優しく笑つてみせる。

「今のは俺が全面的に悪かったし怒つてないから大丈夫。それよりもつまなうせつたと食べに行こうよ、ね?」

お皿もすつぽかさなによつて、わざわざ俺をお越しに来てくれたん

でしょ？

続けたノアールにイチルがその通りなのだと、こくんと頷くとノアールは柔らかく笑った。その青の瞳に怒りの色はない。私はほつと安堵の息をついた。

試しにこのねぼすけさんめと嫌味を言つてみたが、ノアールは氣にもとめない様子でそうだねとやつぱり笑つたまま頷いて立ち上がった。影が翳る。でも、この影は怖くない。だって、

「食いつぱぐれないようにしなきゃね、ほら行くよイチル」「うん！」

星屑の街で差し出された掌がまたイチルに伸びたから。

思わず破顔してその温かい掌を握りかえした。星屑の街で独りでいた私を攫ってくれたこの温かい掌がどうしたって大好きでしょうがないのだ。掌から伝わる温もりにふにゃりと頬を緩めると足が地面を離れて。ぎゅうっと抱きしめられた。

「ノアールわたしべつにつかれてないから歩いていいよ？」
「俺が抱っこしたくなっただけ。だからイチルさんは大人しく運ばれてください。分かつたかなー？」
「はーいせんせー！」

一瞬、きょとんとしてしまった私を覗き込んだノアールの瞳が悪戯つ子のように煌めいていて。私も元気の良い声で返事をして、そしてまた一人で弾かれるようにならけらと笑つて廊下に出た。

心地よい揺れと、服を伝わる温かさ。そしてほのぼのとした雰囲気のままイチルとノアールは食堂へ向かっていった。

案内人との関係について（後書き）

案内人とトラベラーの一日、朝から晩までを「説明致しました。

案内人との関係について2

ノアールに抱っこされたまま食堂に連れて行かれた私は周りからの微笑ましい視線にびつしひしに突きされた。ええい見るな！私はパンダではないのだ！

むむと睨み付けるが皆一様にして頭を撫でて行く。今はお腹がすいているから許してやる。反抗するきも起きぬのだ。

イチルは、んじょっとノアールの膝の上で身体を捻つて座り直す。なぜなら机は大人用に作られていて、今のイチルでは椅子に座つても頭が机から出ないからだ。

ノアールが一回私のお腹に腕を回してずり落ちないようにしてくれた。前に良いとしこいた女がなんでこんな屈辱を受けねばならぬとノアールにくつてかかつたが爽やかな一笑に異議が伏せられた。その爽やかな笑みに異議あり。

かちや、とスプーンがお皿に擦れる音がして机の上を見ると目の前には黄色いオムライスとサラダとフランスパンが平らな皿に盛りつけられていたイチルは、ぱあっと瞳を輝かせてすぐさま小さなスプーンを手に取った。

戦闘態勢完了なのだぞとノアールを見上げると、ふわっと笑ったノアールは手を伸ばしそのオムライスを小さなお皿に寄せて私が届く所に置いてくれた。

オムライスの断面からとろとろな卵とトマト色のご飯が顔を覗かせ、

恥ずかしいと顔を隠すみたいに湯気がぽわんとイチルの鼻をくすぐつた。美味しそうとスプーンを突っ込んで口の中に放り込み広がった味にゆるりと頬を緩ませる。幸せだ。

「ノアール！ オムライス美味しいぞ」

「そうだね、はいイチルあーん」

口元に持つてこられたノアールの手に私は警戒することなく、ぱかっと口を開いて受け入れた。小さい子の頸でも噛み切れる柔らかめのパンだ。

「てめえも相変わらずだなノアール」

もふもふと咀嚼していた一人が声がした方に顔をあげると紺色のスウェットを着たヤンキーがこっちに近づいてきた。眉なしで釣り目で細マツチョで金髪の頭に刈り込みいれてるからヤンキーって勝手に呼んでいるのだが、案内人 Gandock 通称ヤンキーだ。

そのヤンキーが、がたんと前の空いている席に腰掛ける。「ようイチル」と Gandock が挨拶してきたから私も「よつ」と頷いた。
「ごくん」とパンを飲み込むとノアールがすかさず、まだパンいる？
と聞いてきたからふるふると首を振つてオムライスに突き刺していったスプーンを口に入れた。おいしい！

「あーああ、つたく案内人もつついにロリコン化かア？」
「うつさいな、羨ましいなら素直にそういうなよ。ねー、イチル」

急に自分の名前がでて反射的にぱつと顔をあげたが、オムライスばかりに気を取られて全く持つて会話を覚えてない。むむ、そんな呆れたような顔をするなガンドック！私だってやるときはやるのだと。

ぐつと眉間に皺を寄せ神妙そうにスプーン片手にこっくりと頷くと、ノアールがふつと噴き出し笑いだした。なにごとだー・ノアールの膝の上に座つてゐるから振動が直に伝わつてお、おちてしまつー慌てて両手を伸ばし突つ張つる。

「あははっ、ははー、ああ、イチル」「めん」「めんつぶつ」

ぱつと落ちないよう机に両手を伸ばし突つ張つたイチルにすぐさまノアールがお腹に手を回し引っ張りあげる。

お皿に盛られた少ない量のオムライスでも五歳児になつてしまつた私の空腹だった胃を満たすには充分だつた。背中にノアールのお腹がくつついてあつたかくてぬくぬくする。

もたれたくて仕方がなかつたけど、小刻みな揺れは我慢し難い。でも、なんで急に笑いだしたのだ？

そんな不思議にきょとんとノアールを見上げてみるけどまだ笑い続けていたから答えが貰えそうにない。ならば、と前に座つてゐるガンドックを見てもガンドックはぽかんとして私を見ていた。眉毛がない。どうしたのだ刈り込み。

二人に無視されたような形にイチルがふつと頬を膨らませるとようやくガンドックが動いた。額に手を当てる。指の間から見える金色

の眼は、疑心に満ち満ちてイチルを見据えていた。

「なア、こいつ本気でもと二十歳の女なんだよな？見えねえよ、精神的にももろガキじやねえか」

「ガキじやないもんうるさいだまれヤンキー」

「ほれみろ、ガキだ」

「ガキって言つたほうがガキなんだぞ！」

「まあまあ、可愛いから良いじゃん。それにこれも星屑の街にいたせいなんだシイチルのせいじゃないよ」

「だつつてもこいつが盗られたのは単に体の成長だらうが

「体に精神が引っ張られてる可能性だつてなきにしもあるずでしょ？」

「わたしは見かけは子どもずのうは大人なのだ！」

売り言葉に買い言葉と勢いづいて身を乗り出した私のお腹に回された腕がほんのりと力が入る。星屑の街。あの光の川があつた所だ。

あそこに長くいると何かを奪われるらしく、私はもののみごとガンドックのいう『成長』を奪われた。じゃあ一生小さいままなのか？という疑問が浮かぶがどうやら『流れ星』を作ると奪われたものが少しづつ返ってくるらしい。

流れ星に三回お願ひすればいいのか、と聞いたらノアールはそうかもねと笑った。

それよりどうしたガンドック。顔色が悪いぞ。体調が芳しくないのではないか？さつきノアールが笑った気配がしたがまさかそれでは

あるまい。

ノアールの笑顔は優しくてあつたかくて眠たくなるようなそんなものなのだから。

ぽわんとした気持ちにゆられイチルがこてんと頭をノアールの胸に預けると大好きな掌が頭におりて。ふにゃと笑つた。がすぐさまはつとする。

ほのぼのした雰囲気が居づらかつたのかなんのかは知らないが Gandockがかたりと立ち上がつたからだ。

ノアールが不機嫌そうにGandockを睨めつけるが、鼻であしらわれた。

「シャロン神官から伝言だ。仕事を振り分けるから来いだとよ

くるりと背を向け食堂をだらだらと出て行つたGandockを見送つて私はノアールを見上げた。ノアールの綺麗な青色の眼も私を見下ろしている。シャロン神官からの呼び出しこととは・・・

くるりと膝の上で方向転換をして

「はつじごとー。」

「お仕事デビューだね」

ぎゅっとノアールに抱きついた。

案内人との関係について③

わくわくじきじゃ。ハンカチとティッシュもきちんと持つたし鞄の中に着替えもいれた。よし！

「忘れ物はない？」
「だいじょうぶ！」

元気よく返事をしながら、よいしょとリュックサックを背負つてくるりとノアールをふりかえるとノアールは片手を壁についてブーツに足を通していった所だった。先に廊下に飛び出したいくらいイチルは頬を赤らめてわくわくしていた。

実際ぴょんぴょんと届かないのは分かつているけどノープに手を伸ばしてしまつくらいに心は、はやっていた。とたんにぼすつと音がして。

頭になにかが被せられてきょとんと手にとつて見ると、まるで花弁みたいに鶴が大きい帽子だった。ここに Ganduck がいたときつとピクニックにでも行く気なのかと突っ込んでいただろう。

「よし、こいつか」

笑顔と一緒に差し伸べられた手をとつて、私たちは部屋をあとにした。

とことことノアールの指先一本をぎゅ、と握り締めつつ恭くと女人案内人やトラベラーがそのちまつこい姿に母性本能がくすぐられるのかチヨ「やら餌やらを手に持たせてくれた。

「あら、初仕事なの？頑張つてね」とにこにこ笑つて頭を撫でて去つて行く。色々な人に激励とお菓子をもらいつつノアールと仕事部屋の一つの扉をくぐつていチルは部屋の惨状に思わずぽかんと口を開いて眼を見開いた。

黒い眼に映るのはただただ散乱した紙の束だ。

部屋の脇に並べられた書棚にはこれでもかと本や紙が無造作に詰め込まれて、彼方此方に書棚に入り切らなかつただろう本がジエンガみたいに積み上げられていた。いつか倒壊すると思つ。

ちろ、と近い足元を見ても広げられたままの本や紙が散らばつて足の踏み場もない。

まるで書物の海だ。ビニを踏んで進めばよいが分からぬと一の足を踏んでノアールを見上げると、ノアールはこの惨状を歯牙にもかけず踏み進めた。手が繋がれてるためイチルも必然的に引っ張られてぐしゃりと靴底が本を踏み付けて超えた。

途端に鼻をつく古めかしい紙のにおい。図書館の、奥の奥にぽつんとある古めかしい不思議なにおい。

本とか紙とか踏んで良いのかといつ良心が渦巻いたためちょっぴり抵抗してみた。ほんのちょっぴりだけど。そんな小さな抵抗にノアールはもちろん気がつかずそのまま進み奥の机の影を覗き込み、盛大に溜息をついた。私の身長では全く見えない。

一体なにがあるので。むむっとしてると、ノアールの視線の先のなかが動いたからイチルにも見えた。もぞもぞと動いたその物体が、腰掛けていた椅子から立ち上がる。さらりと短い白髪が揺れた。

おじいさんかと思つていたら吃驚するくらい若かつた。多分、ノアールと同じくらいかな、どうだろうな。神官つていつてたけど、なるほど確かに神に仕えるのが相応しいくらいに綺麗な顔だった。

瞬きが無かつたら美術館に石膏として置いてあっても不思議じゃないそんな顔。世の中の女性が騒ぎ立てそうな感じだなあととほんやり思つたけど付き合いたいとか愛を囁いて欲しいとかまでイチルは思わなかつた。私は面食いじやないのだ。

しかも、五歳まで年齢が退行してしまつている。五歳に愛を囁く云々とかただのロリコンだろ。うわあ、こんな綺麗な人がロリコンとか想像したくないのだぞ。

じろじろと青年を観察あと本に視線を向けた。青年の片手に収まっている本は小さな本だ。こんな人はどんなお話を読むのかなと、首を傾げたイチルに白髪の青年は、さきほどのイチルを真似たようにじいいと赤い瞳でイチルを見下ろす。うひつ。

「ちょっとシャロンそんなガン見しないでよ怖がつてるじゃん」

「…………小さいな」

「ぴぎやつ」

予備動作なく急に伸びた手に心底驚いて思わず変な声をあげてしまった。

ぼす、と乗せられた手はすぐさま離れていく、ふむ、と白髪青年シャロンは考え込んで掌をぱうっと見ては「ぐんと頷いた。全く持つてイチルには意味が理解できない。

訳が分からなかつたきゅ、と握り締めていたノアールの指がまるで大丈夫だよといつているよつで。私も握りかえした。ありがとう、だいじょーぶ。ちょっとびっくりしただけだから。

「初仕事だつたな。・・・これでどうだ

ぱつと渡された紙をノアールが受け取つてすぐさま眼を通す。私も背伸びして見ようとしたけど見えなかつた。残念。がつくりと肩を落としたイチルをシャロンがじつと見つめる。ぴきや。

「流れ星が見れるといいな」

なんでこいつを見るとき瞬きしないのだシャロンとやら。怖いのだ。

イチルにとつて綺麗な顔で瞬きされず観察されるのは一種のホラー感覚であつたから、そう言つて興味がなさそうにシャロンの視線が手元の本へ向かつたことにまつと胸を撫で下ろした。

「イチル、俺がいいつていうまで決して瞳を開いたらダメだからね

大きな古い扉の前でノアールの掌がイチルの両瞳を覆つて。従つように閉じられた目蓋の裏で、捻れた朱い月がどうしてか浮かんでは消えた。

で、どうして目を開けた瞬間にこんなに大きな、

「うみが見えるのぉおおおお————」

あああああーと私は膝をついて晴れ渡る綺麗な空を反射する海へと叫んだ。

人魚姫1

太陽も射し込まない深い深い綺麗な海の底で、女は長い髪をそのままにくるりと回つて光が揺らめく上へと目指す。昇ればのぼるほど、消え入りそうな淡い水色の光が海を照らしている。

足があるはずの所は、魚の尾びれで、滑らかに水を蹴る。

だが不思議なことではない。なぜなら彼女はこの海を支配する人魚王の末娘であり、彼女自身も大勢居る姉と同様、人魚姫と呼ばれていたからだ。

女はふと眉根をよせ海の空を仰ぎ見るが、遊んでくれと身体をこすりつけてきたイルカに気が行つた。けれども、その逸らした一瞬で女はどうやら海がぐずり始めたことに気がついた。伊達に人魚王の娘ではないし、海が気分屋なのは海の底で生きてきた以上重々理解していたし普段は氣にもとめないので、どうしてだろう。

「・・・不思議ね。今日は何だか上にいかなきゃいけないような、そんな気持ちが溢れて止まらないのよ」

「きゅう？」

「ふふ、分からぬわよね」

美しい声で紡がれた言葉が全くわからないとでもいうように、きょとんと首を傾けたイルカに苦笑を向けて女は、また上へと視線をあげた。海と違つて本当に果てがない空へと想いを馳せて。

海が荒れる、荒れる。

嗤う風に離し立てられて、海が泣く。唸り声すらあげんばかりに荒れて荒れて荒れて、さつきまで射し込んでいた淡いいろの陽光もまぜつかえしてぐちやぐちやに溶けてきえさせたのに

そんなとき、真暗な海の空から。きらきらと射した光に私はとつさに手を伸ばして。腕の中にその光を受け止めた。金色を纏つた彼の目蓋は苦しげに閉じられていて、女は直ぐさま海と空の境界線に急いでいた。

陸と海の境界線。私と彼の境界線。もつと早くに気がついていれば良ろしかったのに。そんなことをこまちり思つても結局私はあの日の光に手を伸ばすのでしょうか。何百回だって、何万回だって。繰り返されるたびにきっと。

そしてやつぱり私は、海になるのよ。

* * * * *

潮風に身体がべたつくのだ。

イチルはム、と頬を膨らませながら砂浜の上でさんかく座りをしていた。眼を見開いたときからイチルはそこから一歩も動いていない。本当はイチルも子どものように、さざなむ海へ裸足で駆け走りたかったがノアールの姿がどこかへ行ってしまったため、じつと我慢しているのだ。

急に放りだされた砂浜で手持ちぶさたに砂浜に指を突き刺し、ぼうっと柔らかい音を奏でながら引いては押し返す海を眺めていた。海水は泳ぐ魚さえ目視できるほど酷く澄んでいて、津波の白いあぶくが砂浜に染みこんでは消えていく。

水色や緑色を混ぜたような、碧色の海。遠くにある濃紺がいわゆる水平線というやつなのだろうか。ずさずさと砂浜に指をつっこむ。砂浜の横には白い海へと続く階段があつたがちらりと視線を一度向けてからすぐさま興味なさそうに逸らした。

ざわざわざわざわん。

いつたいどれくらい待つたのだろう。

「ノアールビーにこつちやつたのだ」

その言葉と同時に今まで抑えていた感情がじわりと溢れて心臓がワシ掴まれたみたいで、ひゅと浅く息をすつて胸元の服を掴む。

くしゃりと服に皺が寄つたが、イチルはじつと待ち続けた。

寂しい。心細い。置いてけぼり。ノアールが迷子。どこにいるの。ここはどこ。私、捨てられてないよね。初仕事なのに。早くしないとガンドックに馬鹿にされちゃうよ、ねえノアール。はやく私をむかえにきて。

この思いは、子どもが親を慕うような純粹な好意なんだろうか。それとも、たんなる依存なのか。ううん、だつて私いま見た目だけだけど五歳だもん。ノアールは保護者だもん。だから依存じゃないのだ。

ふるふると首を振つて火照る身体のまま膝に顔を埋めてじつと耐えた。

心の中は不安で不安で仕方無かつたがイチルにはノアールが迎えにくる確信があつたからだ。科学的証拠を提示しろとかいわれてもできなけれど、それでも、歪で気が狂いそうになつた『星屑の街』で唯一イチルを見つけてくれた、そんなノアールだからイチルは待つのだ。早く、ノアールにぎゅつしてほしい。この焦燥感をどうにかしてほしい。

縋り付きたくなる思いを押しとどめて空をふいに見上げると晴れ渡つた空だった。雲一つない快晴。じりじりと容赦なく私を焼け付ける太陽にくらくらして舌打ちしたいくらいだったが、それでも空を仰ぎ続けた。確かに眩しいし肌がひりひりして痛いけど。空の色が、ノアールの瞳の色だつたから。ぱたんと砂浜に横になつて身体全体を空へと映す。

「ここはよく人が行き倒れてるなあ。」

ざわざと大きな漣がおしてきてイチルのブーツを濡らし、ふいに長い影が砂浜に広がつて。はつと私は振り返つたけど、その先にいたのは待ち人じやなかつた。

その男の人ガンドックみたいな綺麗な金色の髪を太陽の下、煌々と輝かせてイチルを見下ろし眉尻を下げて呆れたように笑つたから、まるで童話の中の王子様みたいだとぼんやりと思った。その金色の瞳に懐かしさの色が滲んでいるのにふと気がついたけど、口を開く前にイチルは脳をぐちゃぐちゃに掻き回す鈍い痛みにそつと意識を奪われた。

ふかふかぬくぬくむらさりふわふわ。

そんな擬音語が見事マッチするものに私は包まれているのを皮膚を通じて感じていた。採れたての綿みたいな、紡ぎたての綿みたいな蚕は繭のなかこんな心地良さにくるまれているんだろうか。

すんと小さく鼻を鳴らすと太陽のにおいが広がった。きもちいい。なのに、

「あ、起きた？」
「…？」

急に繭が破られてイチルは眼を見開いた。

カツと眼を見開いたイチルに吃驚したのか少年はぎょっと勝気な顔を強張らせて椅子から落ちた。

いッてーーと腰をさすつている。なんなのだ、ここはいったい。さつきまで砂浜で空を見上げていたというのに。

側頭部に手を当ててきょろきょろしているとすかさず少年が転げたまま現状を説明してくれた。若干不機嫌そうに口を尖らせつつだが。

「お前が急に眼え見開くからビビッたじゃねえか！王子もいいかげん犬猫じやねえんだから人間拾つのもたいがいにしろつづつの…つ
痛ええええ！」

「口さがない」とをいうんじゃないわい、この悪ガキ

仕切られたカーテンからのつそりと現れた老人に拳骨を貰った少年は腰の痛みから復活したばかりだつただろうにまた撃沈してしまつた。

痛そう。あれ絶対たんごぶができるぞ。

そんなことをぼんやりと思っていると、呻き声をあげつつたうち回る少年を後日に老人がイチルに手を伸ばした。

咄嗟に眼をつぶろうとしたが、伸ばされた手は酷くゆっくりしてい

て。

優しく前髪を払われたかと思つたらひんやりと冷たい温度がイチルのおでこに広がつた。その冷たい温度で始めてイチルは身体が火照つていることに気がついて差し出されたグラスを受け取つて縁に口をつけた。

無味無臭なお水。

くるくると冷たい水が食道を通つて胃に落ちていいくのがよく分かつた。美味しい。

「まだちいとばかし暑いが安静にしとれば大丈夫じゃ。おいたイトルト、嬢ちゃんを呼んでこい」

無心に水をちびちび飲むイチルから未だに伸びている少年に向かつて老人が声をかけるということはきっとティルトとはこの少年のことだらう。ここには私とおじいさんと少年の三人しかいないし。

イチルの予想通り少年は立ち上がつた。ふるふると拳が震えている。

ぱつと顔をあげてティルトは老人の白い服を下から掴み上げて吠えた。

「人使い荒いんだよくそジジイ！」

「ふん、そんな糞の弟子であるティルトも充分糞じやわい！…それより早う行かんかつ」

「〜〜〜つ！」

老人の一喝にティルトはぐうつと口を閉ざしてきいつと睨みつけてくるりと身を翻して仕切りカーテンの外へ出て行った。ずんずんと行き場の失った怒りを宥めようとしたいるのかなんのかは分からなかつたが足音荒く出て行つたティルトに老人は肩をすくめて、倒れた丸椅子を元に戻しそこに腰掛ける。

ぴくんと近すぎる距離に肩をはねさせる。

「そんな緊張せんでええ。儂は医者じゃ」

「・・・おいしゃさん？」

「ああ。王子が海に行つたらお主が行き倒れていたらしくてな。まあ軽い熱中症じやよ」

そういうえば確かにおじいさんの服、お医者さんが着るようなのだ。だからティルトも同じのを着ていたのか。

じろじろと観察して合点がいったイチルはきょとんと傾げていた頭をふむと縦に頷き、伸ばされた掌に空になつたグラスを手渡した。だいぶ身体の火照りが薄まってきたような気がする。身体が軽やかなのだ。イチルの顔色の変化に老人も笑つた。

「だいぶ良くなつたようじゃな」

「はい。わたしもそうおもいます」

小さいから田舎がうまく回らなくてしたつたらずなお礼になつてしまつて恥ずかしさでイチルは顔を赤らめた。だから、敬語なんて使えないのだぞ。なのだとかの方が言いやすいのだ。

敬語を使うとなんにせよ微笑ましいとかいつて笑われるけど！ノアールも別に敬語使わなくていいよつて言つていたし。そ、そうだノアール！！

「せんせーはノアール知らない？ちやぱつできれいな青いめのおとこの人！」

「茶髪で青い瞳？そういう人種は多いからの・・・。父親か？」

「ちちおや・・・」

ただ父親かどうか尋ねただけなのに、うんうんと唸り始めたイチルに老人こと先生は首を傾けた。父親じやなかつたら兄か。

唸り考え込んでいる少女は端からみてもまだ小さい子どもだ。そんな子どもが王家の土地であるあの砂浜まで一人でいけるはずがない。そうするとやはり偶然父が兄と迷い込んでそのまま逸れてしまったのだろうか。

王子の話では周囲に足跡はなくじつとして動かなかつたようだし、足跡が風化するまで太陽のもと待ち続けていたらしい。こんな、幼子が、太陽の下で、熱中症になるまで！－なんて健気なんじやつ。

じわりと老齢な瞳に熱いものがこみ上げ、小さな頭をよしよしと撫でた。どこぞの悪ガキと天と地ほどの差に爪の垢を煎じて飲ませてやりたいほどだった。だが、イチルに先生の思考など推測さえでき

るはざもなぐじゅと先生を見上げた。

もしや恥ずかしくて顔を赤らめたのが心配だったのだろうか。

「せんせー、わたしもつ本当にだいじょうぶなのだ」

本当に大丈夫なのになぜか先生は手を止めて逆の手で自分の目蓋を覆つた。ほんとにどうした。だれか説明してくれ。

「なにしてんだジジイ。そんな触診みたことねえぞ、なんだセクハラッてやつか？」

しゃつヒールが擦れる音とともにひょっこりと顔を出したティルトに困ったような視線を送ると半眼で先生の腕をどこでくれた。中学生くらいのこしつかりしている感動した。

「なんじゅ ティルトもひ帰つてきたのかつと、おお嬢ちゃん久しづりじやな」「

振り返つて嬉しそうな声をあげた先生にイチルもその先を見る。白と紺色を基調としたスカートのフリルが揺れて。イチルは瞳を輝かせた。

「び、びじんさんだと・・・」

ふわふわした長い茶色の髪になだらかな海の色みたいな青い瞳。熟れた桃色のようなふくらした唇。困ったように下げられた眉すら美しい柳だった。び、びじんだーー！いやむしろ可愛いかもしけな

いけど。

ぱわんとなつたイチルの瞳にはもはやメイドらしき彼女はもじもじの兎にしか映つていなかつた。動物園にある触れ合いコーナーの隅で打ち震える兎さん。見上げる瞳は涙で潤み、近寄らないでくれと訴えかけるそんな・・・、

「いいではないか・・・！」

薄らと頬を赤ら熱い吐息とともに吐き出された。幼女に似つかわしくない恍惚な笑みを浮かべたイチルに思わずティルトは危なげなにかを無意識に感じ取つた。なんか雰囲気が気持ち悪い。一步下がる。

だが、師弟関係にある先生がイチルのあの笑顔に一番近いくせに身動きすらしなかつたのが悔しくてまた一步進む。一進一退ならぬ一退一進。

自尊心を取り戻しつつあつた途中、肩に柔らかな手が柔らかな笑顔とともにティルトに向けられ彼女が横をさつと追い越した。

恍惚としていたイチルがベッドの上から彼女を見上げる。じつと瞳が交錯すること数秒でイチルが首をかしげた。

「なに？」

そう、彼女は一言すら発せなかつたからだ。否、

「オケアは話せないんじゃよ」

椅子に座つたままどこか疲れたように先生は言つた。静まり返つた
涙を散らさないようこゆつくりと、掬いあげて。話さないんじやな
くて話せない。なるほどそれなら確かに沈黙のままでもおかしくな
いのだ。

うとうんと納得するイチルに続けるよつに先生は付け足した。

「喪失した記憶が甦れば声を出す」ともできるじゃろうに。こんな
気がきく娘っこなのになあ

最後の方で声を震わせた先生は思わず顔を覆つた。医者だのに救え
ない、そんなやり切れなさ。歳と共に刻んだ皺だらけの手に柔らか
い手が重ねられた。白くてきれいな手。

「悪いなあ嬢ちゃん」

ふるふると首を振る彼女、オケアに先生は眼を細めて立ち上がつた。
ふんふん、あれ、記憶喪失なのになんで名前は分かるのだ?

「そもそもしつなし、なんで名前はわかるのだ?」

不思議そうに見上げてくるイチルの額にもう一度手をあてて先生は
笑つた。ほつれい線に皺が刻まれる。

「王子が付けてさしあげたんじや。そつそつ、その王子からお主が
眼を覚ましたら嬢ちゃんが世話をするように御達しがきておつてな。

嬢ちゃんに取り合えずついて行つておくれ

ぽんぽんと優しく頭を撫でながらそう言つた。いつたいなんなのだ。
王子つて誰だ。そ、それよりもノアール！あやつ迷子ではあるまい
なー！ムキー、いい歳こいてる大人なくせにいいいい！！

誰か一体どういうことが説明してほしい。ぐつたりと肩を落とした
イチルに先生が慌て出すがそれに構う暇は彼女にはなかつた。

なぜなら扉の向こうは海でした状態からの熱中症ぶらす王子発言。
そして、シャロンから貰つた仕事についての資料もノアールが眼を
通しただけでイチルのもとには何の情報もないのだ。

案内人のくせに案内してないじゃないか。先ほどまでは寂しくて仕
方がなかつたが、冷静に考えてみるとノアールは非だらけだ。

むすりとそっぽを向きつつムカツ腹をたてる。

だけれども、足元が見えない状況はなにひとつ変わらなくてイチル
を不安定にさせていることは間違ひなかつた。

ティルトに促されベッドからぴょんと飛び降りると足裏がひやつと
した。裸足で石畳の上へ降りたから当たり前だつた。

確かに冷たかつたが、さきほどまで火照つていた残照がなだらかに
冷たさを吸収してイチルの体を軽くさせたためなんどかその場で足
踏みをする。と、呆れたようなティルトが奥の方からスリッパらし
きものを持ってきた。

「まじ早くはけよ

冷たくて気持ちいいから要らないと言ったが、人前でひとりだけ裸足で歩き回っているのも惨めっぽくてイチルは渋々と足元に置かれたスリッパらしきものに足を通した。

見かけによらず軽く、爪先が少しだけ余るが歩くには支障がなさそうであつた。こんな小さい足にあうのがよくあつたものだなどイチルは関心すると同時に疑問に思つたが、きつとテイルトのお古なんだろう。イチルはスリッパもどきに頓着することをやめた。

あれだ、バレー・シュー・ズつて思えば良いのだな。

先生たちに促されカーテンレールの向こう側に足を踏み出した瞬間、視界に飛び込んできた光景にイチルは顔を青く染め上げた。だって、すうっと肺一杯に空気を吸い込んで。

だつたのだから。

視線の先の大きな出窓の向こう。

童話に出てきそうな大きな城は吹き抜けた一陣の風に揺らぐことなくそびえ立っていた。

とまあなんだかんだで王子様の御厚意によつて城勤めを許された私は海で生き倒れていた仲間のオケアの仕事を手伝つようになつた。

とかいいつつもイチルはその身の小ささも合間にオケアの摘んだ花を持つたり、頼まれるお使いくらいしかできなかつた。

カートを押したくとも重たくて腕がつるし、なにしろ背が低くて前が見えない。大量のシーツを運びたくとも許容量は流石に大人の半分以下だ。

「小さいっていやだなあ」

そう言つて見下ろした手は、記憶よりもずっと小さい。

イチルは星屑の街で奪われたとはいえ歴とした大人だつた。身の回りのことも「自身で事足りたし、余った手を他者に差し伸べることだつてした。それなのに今となつては自分のことすらままならない。

なんでもできた自分を知つてゐるから、今の状況がどうしてもイチルにとつて歯がゆかつた。

記憶と違つて小さい手をぎゅ、と握り締める。

「？」

「なんでもないのだぞ」

足手まといでじょがない自分を嘲笑しそうになつたが、休憩中食堂の隅っこで隣に座つていたオケアを見上げる前に。押し殺すように、隠すようにして息を整えてから顔を上げて笑つた。

覗き込んでくる青色の瞳はそれでも不安そうに翳つているのが心苦しい。こんな美人に心配をかけてはならぬのだ！

海みたいな綺麗な青色の瞳を曇らせまいと息巻いて目の前のクッキーを口に放り込む。

途端に、さくつとふわっとバターの風味が口一杯に広まってへらつと笑つたイチルにようやくオケアも心配そうな面持ちを引っ込めた。

さくさくさくさくと軽やかな音を立てながら食べるイチルと、それを微笑ましげに見つめるオケア。どこからともなく花畠がみえる。

二人を隠れて見ていた人々はぽわんと頬を緩ませた。 クッキーを出してくれたシェフもお玉を片手にぽわんとしている。

実は今イチルとオケアのペアは城勤めの人々の隠れたアイドルなのだ。

声が出ないがそれでも美しく心配りに事欠かず柔らかく笑うオケアに、その後ろをとたとついて行き、いじらしくも小さな頑張りをみせるイチルが微笑ましくて愛しかつた。

子どもがいない男ですらそう思つたのだからいわんや他をやである。こうやってひとつりと、だが確實に広まつた二人の話はとうとう王族の耳にも届くこととなつた。

「二人ともいま大人気らしいね」

にこ」と笑ったきんきらのこの人は、イチルを拾ってくれた恩人であると同時にこの国の第一王子であるサー・シャリオンである。本当はもつと長い名前だつたけど忘れた。

奇しくもサー・シャリオンにオケアも海で生き倒れていたところ救われたらしい。ティルトが犬猫云々とぼやいていた理由がようやくイチルは分かり「一国の王子なのに・・・」と呆れかえつたが、サー・シャリオンのそのお人好しさに救われたイチルは何も言えなかつた。

「二人を独り占めしてしまってなんだか臣下に申し訳ないね」

悪戯気な笑つて紅茶に手をつけたサー・シャリオンを見てイチルは期待に満ちた目で注視する。

そうそう、オケア手製の紅茶を飲むと良い！そして褒めてあげるのだ。ぐつと手に汗握りつつそう祈る。

この度重なる御茶会は実はこの城に来てから一度や二度ではなくほぼ毎日開かれていたが、その中でイチルは気がついたことがあつた。本人にも確かめた。伊達に歳は喰つていない。

「オケアが淹れてくれた紅茶はいつも美味しいね」

きらりと笑んだサー・シャリオン殿下に、オケアの頬に朱が走る。そして、ちょっと俯いて恥ずかしそうに微笑む。小さくて愛らしい花がふわっと綻ぶような笑み。

正直言おう、くらつとする。女の私でもくらつとする。美人はなにをしても特だ。だが、くらくらしてる場合ではないのだ。私はキュー

一ヶ月後にならぬのだぞ。

そう、イチルが気づいたことこのつのはオケアの恋心とこいつやつだ
つた。

「おいしかろう！」のまひんもオケアとわたしとシロフの三人で今田つくつたのだ！」「まひん？」

「・・・ま、まひいん」

「まいん・・・？」

「まいん、まひ、まひいん。・・・う」

「のぞリオン！ 見ればわかるだろ？！…」
「うん、まひんだね」
「まひいんを食べるがよい」

まひにんを食べるがよい

胸を張つてお皿を、ん！と差し出すイチルをサー・シャリオンはまひいんねと笑いながら手

サー・シャリオンは王族であるが、対等に渡り合うイチルを気にいつていたし、物言えぬオケアもまた信頼していた。

いつからかこの茶会が常に気を張り巡らせる自分が唯一肩を下ろせる空間になつていたのに気がついたのは最近のことだ。この空間が心地よくて普段は「王族の義務」として咎めなくてはならないイチルの言動もあつさりと流してしまつようになつてしまつた。

とはいえ、サー・シャリオンは王族としての自分の地位など気に止めぬ性格であったのだが。

未だに、「まひまふ」言つイチルに差し出された皿の上には大小さまざまマフィンが飾られていたが、サー・シャリオンは特段形が悪く歪なのを手に取る。きっとこれは「この田の前にいる幼子が作ったのだろう」と思いつつ。

「これが、イチルが作ったやつかな」

その瞬間、ぱちくりと大きな濡れ鳥の瞳を瞬かせたイチルにサー・シャリオンは笑つてもう一つ摘み上げた。

「それでこれは、オケアだね
「なななんで分かるのだ！？」

かだんと椅子から立ち上がりつて身を乗り出すイチルにサー・シャリオンはひとつ笑顔を向けてから、新たな紅茶を淹れてくれていたオケアを見上げてそうだよね、と尋ねた。

尋ねるといつにはその声には確信で溢れていたが。

オケアもやはり吃驚したのか少しの停止のあと「くくくと頷いた。イチルが誰がどのマフィンを作ったのか分かるように並べようと提案してきていたため、配置をオケアは覚えていたがそうでなければどのマフィンも同じにしか見えない筈だ。

なぜサー・シャリオン殿下は分かるのだろうと小首を傾げると彼はくすりと笑うだけで教えてくれなかつた。

だけど。

夜空に輝く星のように美しく零されたその笑顔だけで、オケアは泣

きたくなるくらいに胸が一杯になつた。教えてくれない理不眞似や
理由が分からぬ悔しさじやない。

(だつて)

今は最早失つた声でそつと泣かせへ。
鈴の鳴るような声と姉様たれに褒められた自分の声をなぞつて。唇
が柔らかく弧を描いた。

サー・シャリオンの視界に入ることもままならなかつた『人魚姫』
であつた自分が、今こりやつて彼の前に立つていられる」ことが、気
を抜いてしまえば泣いてしまいそうになるくらいに、
(こんなことは奇跡よ)

ただただ幸せで、愛おしくて、嬉しくて。

ずっとこいついう毎日が続けばよいと、一つ、柔らかい微笑みがオケ
アの顔に浮かんだ。

執務に戻つたサー・シャリオンの背を見送つたイチルは、にやあと口
角を吊り上げたままオケアを見上げると、それはもつ嬉しそうな瞳
を向けられた。

暖かさと愛しさの中にほんの少しの切なさの色。ああ、もつ本当に
あれだなあ。

むふふふ。

「いじかる乙女のかおなのだ」

「つ！」

笑みを浮かべ、したり顔をしたイチルにオケアはパツと隠すよつこ両手で顔を覆つた。

うふふ、初々しい奴め、なに恥ずかしがらなくともよいのだと！私が手すから支援してやろうと笑みを深め胸を張つたが、オケアに恨まし気な眼でみられた。なぜなのだ。

さんざんからかい倒していたが途中でオケアが別の仕事に行つてしまつた為にイチルはこの後はもうお役御免だ。仕方なく医務室にとぼとぼ向かつっていたが途中、見覚えのある背中に飛びついた。

文字通り、飛びついた。

「う、おつー？」

「ティルトー！！」

「ちょ、おじこら絞めるなぐるじいイイイー！」

「・・・おお、これはすまぬ。だがはなさんつ

「なに悟り開いたような顔して言つてんだよー」

勢いを緩めることなく飛びつかれたティルトは転げそうになるのを必死に踏ん張りぐるりと身体を回した。超動悸すんだけどと睨まれたが、うへへと笑つたイチルは背中にまわしていた手を放しティルトに話しかけた。

大きな皮袋のショルダーバッグを肩からかけている。普段は白い看護服を着ているのに。

「どこに行くのだ？」

「つたぐ。海だよ海。イチルこそ仕事はどこへしたんだよ？」

申し訳なさをまるつきり出さず、けろりとしたイチルにティルトは何だか悟りを開いた気がしてショルダーバッグを掛け直し肩を竦めた。

そしてこう言つと絶対この小さな彼女も付いて来るだらうことも何となく予想もついていた。

「どうせお前も行くだろ。ほら来いよ

「いくー！」

予想どおりの元気の良い返事に苦笑を零すが気にした様子はイチルにはない。神経が図太いのかとズレだ思考に飛ぶ。が、イチル用にタオルを増やしたほうが良いだらうとの考えに至りすぐそこにある頭に手を乗せた。

「タオルとつてぐるからお前は先に第三庭園のどこで待つとけな

「だ！」

「だ！ってなんだ、だ！って」

ぼすぼすと頭を撫でて軽口を叩いたあと医務室の方に走つて行つたティルトの背を見送ると近くにいた人々は気がつくとぽわんと和んでいた。ぽわんぽわん。

そして言われた通りに第二庭園に足を向けたイチルの側にわらわらと侍女が集まり結局ずらすらと集団で第三庭園に向かうこととなつ

た。

「ティルトくんもどうどうお兄ちゃんねえ」

「うふふ、兄妹みたいだつたわね。」

にっこりと笑顔を浮かべる侍女から貰つた飴玉をじろじろと口の中で転がしてイチルはきょとんと首を傾げた。

実は、ティルトとイチルのペアも城中のアイドルだったのである。

小さい頃から知つてゐるティルトがより小さい子を甲斐甲斐しくお世話をしているのが大層ショタコ・・・、ならぬ年下の男の子に胸きゅんしてしまつお姉様方を虜にしてござらし。わゅんわゅんわゅん。と胸がなる音がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1585z/>

星屑の街

2012年1月8日20時52分発行